



# 世界をみつめて

## 『三国志』余滴1

### 諸葛孔明の食欲

福原 啓郎

小説『三国志演義』の最後のクライマックス、五丈原に陣する諸葛孔明とそれを迎え撃つ司馬仲達（司馬懿）の対決の中で少しひっかかる箇所がある。戦いに応じない仲達にしびれを切らした孔明が挑発のために婦人用の髪飾りと喪服を贈る使者を仲達の陣に遣わした。仲達は怒りを押し殺して、使者を歓待し、さりげなく孔明の近況を尋ねた。以下、井波律子訳（ちくま文庫）で本文を引用する。

「孔明どのの睡眠、食事および政務の忙しさはどんな具合か。「丞相は朝早く起きられ、深夜お休みになり、鞭打ち二十以上の処罰は、すべてご自分で取り扱われます。めしあがる量は毎日、数升（二、三合）にすぎません」と使者。「孔明どのの食べる量は少なく仕事は多忙だ。これでは持たんぞ」と、司馬懿は諸將を顧みて言った。

そして、案の定、まもなく、孔明が亡くなり、「死諸葛能走生仲達（死せる諸葛、能く生ける仲達を走らす。「葛」と「達」が韻を踏む）」の場面へと続くのであるが、仲達は孔明の近況から何故長くないことが予測できたのであろうか。ポイントは、「めしあがる量は毎日、数升（二、三合）にすぎません」、孔明の一日の食事量、つまり食欲にある。小川環樹・金田純一郎訳（岩波文庫）では「しかし食事は、一日やっとな数杯でござります」、原文は「所啖之食、日不過数升（啖う所の食、日に数升を過ぎず）」、『演義』のこの一節は歴史書の『三国志』にはなく、孫盛の『魏氏春秋』の「所噉食不過数升（噉食する所は数升を過ぎず）」にもとづく。なお、仲達の伝である『晋書』の宣帝紀では「三、四升」と具体的な数字が挙がっている。

まず確認しておかなければならないのは、「数升」「三、四升」の「升」という単位である。いうまでもなく、中国や日本などの伝統的な容量（かさ）の単位の一つであり、十進法で「一合一升一斗一斛（石）」と10倍ずつ大きくなる（白川静『字統』によると、「斗」「升」「斗」、ともに「ひしゃく」の象形。「升」は、本来は両手で一掬いの量であったが、その量は時代とともに変動した。『三国志』当時の中国と現在の日本では約十倍のひらきがあり、当時の一升がだいたい現在の一合に相当する。すでに、江戸時代を代表する大

学者伊藤仁斎の子伊藤東涯が、中国歴代の諸制度の沿革を叙述した『制度通』という名著のなかで指摘している（「漢の時の一升と云ものは、今日日本の一合ほどときこゆ、大略十分一に準ずべし」）。

漢代と三国時代では一升の量はほぼ同じ。それ故に井波律子訳も「数升」に「（二、三合）」と注記しているのである。日本酒を例にとると、一升瓶三、四本となるとかなりの量であるが、実際には三、四合、つまり御銚子三、四本ということになる（もっとも居酒屋で御銚子一本に入っている実際の日本酒の量はふつう八匁ぐらいであるが）。ちなみに伊藤仁斎父子の旧宅の蔵が京都市内の堀川通りに面して現存している。なお今年の2月、岩波文庫の『制度通』が復刊された。

つぎに検討しなければならないのは、東涯が「数升到にいたらずといふときには、三四合余の食なり」という、孔明の一日の食事量の多寡である。日本文化を海外へ紹介した学者に贈られる山片蟠桃賞やまがたばんとうを受けたこともある六朝史の大家周一良に「南北朝時口糧数」（『魏晉南北朝史札記』）という一文があり、魏晉南北朝時代を通じての兵士への食料支給量を豊富な史料にもとづき論証している。脱穀済みの穀物（米に限らない）。むしろ、北中国ではきびなどの雑穀の可能性が高い）を月二斛、すなわち一日七升が標準であり、それが体力維持の最低ラインであった。ということは、孔明の三、四升というのは、その半分ほどであり、激務をこなしているにもかかわらず、食の細り具合が尋常でなかったことになる。なるほど、仲達が悟ったはずである。なお、余談であるが、孔明の死の十九年前に曹操に投降した張魯は「五斗米道」という名の教団を率いていた。この「五斗米道」は、中国の民族宗教である道教の原点として知られており、その名称は、病気の信者の「治療代」に由来するのであるが、「五斗の米」とは一日七升で計算するならば、およそ一週間分の食費に相当することになる。

ひるがえって、現代の日本の食卓で、四合、茶碗で十杯前後の御飯という結構な量に思えるが、それはおかずが占める割合が大きいからである。ただ、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の一節に「一日ニ玄米四合ト／味噌ト少シノ野菜ヲタベ」とあり、副食がほとんどないにもかかわらず、孔明とほぼ同じ量なのをどう考えたらよいのであろうか。

ふくはら あきろう（教授・中国史）

